

二十歳を迎えた感謝と未来への祈り (東員町・鳥取神社)

TOIN
GOOD
NEWS
PRESS

2023 02

とういんグッドニュース新聞 10

とういんグッドニュース新聞は、全国から届けられた身近なグッドニュースでつくられる新聞です。
健康と活躍のまち東員町から、毎月ポジティブな話題を発信しています。

みんなまで育てる町！

2023年1月8日、東員町の「二十歳を祝う会」が催され、我が家の長男も参加しました。小学生のころからマイペースだった長男。中学生になってもそれは変わらず、学校からのプリントも出してこないほど。

高校1年生の時には、知らないうちに書記として生徒会に入り、2年生からは生徒会長を務めていました。

卒業式の答辞では、まだまだ子どもだと思っていた親の気持ちを良い意味で裏切り、堂々と壇上で話す姿を見せてくれました。

卒業後の1年は職業訓練校に通い、昨年の4月から晴れて社会人に。

自分の道を自分で決め、18歳の成人を迎え、「二十歳を迎える会」を終えた今、さすがにもう子ども扱いはできないかな？(笑)
これまではあなたのことを後

ろから見守っていたけど、共通の趣味にしているバイクでいっしょに出かける際、後ろを走ると言ってくれた時には、今度はあなたが私を見守る側になったんだと感じて、本当に嬉しかったです。

ずっと仕事の忙しさに追われ、家族を支えることだけで精一杯だった母は、子育てが一段落したのを実感してホッとしてから、ハッと気がついたよ。

あなたをここまで育てたのは、きっと私だけじゃない。そして、育てられたのはあなただけじゃない。

おじいちゃんやおばあちゃん、叔母さんや叔父さんたち親族はもちろん、周りのたくさんの方々の大人たち、多くの友人たち、バイト先の方々、東員町という地域の人々。

心からのエールをきみに！

当店のアルバイトスタッフに14歳から学校に行かなくなった子がいます。

彼はもともと本屋のお客さんで、僕がよく本を選んであげていました。

ある時、お母さんから「息子が学校に行けなくなっただけです」と相談がありました。

学校に行かない日々は続きましたが、それでもお店には来て

くれて、宿題をやったりして気分転換になっていたのではないかと思います。

月日が経ち、彼は17歳になりました。

通信高校に通いはじめると同時に当店でアルバイトをしてくれることになり、早くも2年半が経ちました。

もうすぐ卒業です。
卒業後、彼は来年から海外に

厳しくも優しい人たちに叱咤激励され、支えられて、私もあなたも成長をさせてもらっていたんだ。

みんなに育ててもらったからこそ、私も我が子もここまでやってこられました。

本当にありがとう！
(東員町・大倉みり・40代)



行くそうです。

しかも、その理由が「農業を体験したいから」なんですって！学校には行かなかったけど、自分の力で人生を切り拓こうとする力のほうがもっと大事だよ。

これからの道を見据えた彼に、ただただ心からのエールを送ります。

(広島県・佐藤友則・46歳)



ぼくは、スケートボードが大好きです。

二〇二二年は、フレイクカッブという大会で五位になれました。

つぎは、二〇二三年にチャンピオンシップに行けるので、冬休みは、さむくてもれんしゅうを毎日しました。

スケートボードは、オリンピックしゅ目で、ぼくもオリンピッククせん手を目ざしています。

今回れんしゅうのためにかな川けんまで行きました。

もし、東いん町にもれんしゅうする場所があったらいいのになと思います。それがぼくのねがいです。

ぼくはこれからも大すきなスケボーをがんばります。

(稲部小学校・2年生・あんどう そういち)



もう1年

自転車の乗り始めて10年。天気が良ければ初日の出を見に行く。海まで15kmほど自転車で走る。今年は71歳にもなるので、無理をして出かけることもないかと迷っていた。夜の明けの前から自転車を漕ぎ出して、ころんだらしたら大変だ。

毎年、元旦の日の出が見られるかどうか、天気予報が気になった。昨年の暮れは、それもあまり気に留めなかった。大晦日おおみそかの床に就くときに、とりあえず目覚まし時計を5時にセットした。早起きは人の苦手である。もしも目が覚めれば、もしも天気が良くて支度をする気になれば、自転車で出かけるのもいいかと迷

いながら就寝した。

目覚ましのアラームは5時に鳴り、早起きは苦手なのに目を覚まし、床から抜け出した。外は少し明るんでいる。東の空に雲はない。ご来光が拝めそう。例年になく暖かい。自転車を漕ぎ出す気になる。6時、やおら走り始める。空が明るさを増すが慌てることはない。日の出の時刻は7時2分。1時間かけて15kmを走れば、揖斐川いびがわの河口、伊勢湾の日の出には間に合う。

走るほどに辺りが明るくなり始めて思う。70歳を境に、何かを始めるとかやめるとか、年齢を区切りに使うことはない。自転車の乗れる間は乗る。初日の

出を見に走れる間は走る。自分のやりたいことを自分で抑えることはない。自分のやりたいように、もう1年。東の空が明るく赤く染まるにつれ、出かけるまでの迷いは消えて、すっかり強気になっている。

(東員町・MARIOBIKE・71歳)



学校のみんなありがとう

ぼくは去年、足が悪く手術をしました。入院中ぼくは、

「学校に行ったらどうなるのかな? みんなにめいわくかな?」と心配していました。それで頭がもやもやして学校に行くのが怖くなっていました。

その気持ちで学校に行った時、まさきに友達が心配してくれ、「荷物もってあげようか? 重たかない?」

などの心配をしてくれるうれしいことがおきました。

そのことがあり、頭にあったもやもやがいつしゅんでとけました。あらためてそのことがあって、

「学校の友達って大切なんだな。」と思いました。

さらに、かいだんが苦手なぼくをささえてくれたりしました。それをしてから感動が止まりませんでした。

これからも大切な友達と共に生きていきたいです。

(東員第一中学校・1年生・種村空音)



グループウォーキング

私の住んでいる地区では、自治会主催のグループウォーキングがあります。この行事では住みやすい豊かな町をつくることを目的としています。

私がこの行事を通して、良いと思った点は、一つあります。一つ目は、地域の人と世代を超えて関わる事ができることです。二人から五人でグループをつくるため、あまり関わりがなかった地域の人も話すき

かけをつくる事ができます。二つ目は、誰にでもできて、健康を維持することができるところです。スポーツやランニングは、得意不得意があります。しかし、ウォーキングは、幅広い世代に親しまれ、気軽に行うことができます。

だから、私は毎月グループウォーキングに参加していきたくと思っています。

(東員第一中学校・3年生・渡邊心咲)



43歳独身の正月

津軽の生家に帰省を狙ってみたが、今回の年末年始も叶わなかった。「新型コロナが怖い」から拒否されているのではなく、県外から人が来ること自体、その町会では問題視されるらしい。親兄弟から「お前が帰ってくればこの辺のみんなから白い目で見られる」と言われたので断念した。

結局、3年連続千葉のアパートで寝た。寝ながら見た夢では、甥たちとスキーに行ったり、親父と酔だこ(北日本では正月によく食べられる)でビールを飲んだりしていた。昭和7年生まれのばあちゃんからはお年玉まで貰った気がする。何処まで行っても夢の中のことだけだ。

起きたあと、もし実際に帰省していたらと想像すれば、朝から晩まで雪かきをやらされ、お袋からはあれこれ小言をいただいていたことだろう。新型コロナ

が流行る前までは事実そうやって過ごしていたのだし。ところで今頃、津軽の雪はどんな降り方をしているのか。青空から落ちてくるような雪か。下から吹き上げる雪か。なんである、その雪は誰が片付けているのか。千葉みたいに雪がなければ楽だが、津軽の冬も考えてみれば、あれはあれで幸せなのかもしれない。一気に雪が溶ける3月下旬、足元がゴム長靴からスニーカーに変わるだけで、外に出るのが楽しくなる。あの幸せは雪国固有のものだと思う。ちなみにお袋からの文句は、元日にLINEでしっかり頂戴した。「謹賀新年 今年は真面目に生きろ」と。お母さん、お互いにね。雪かきが辛くなったらいつでも呼んでください。

(千葉県・まりもおじさん・43歳)

3年ぶりに響いた歓喜の歌声!

東員「日本の第九」演奏会

2022年12月25日、第34回「東員「日本の第九」演奏会」が開催されました。

作詞家・なかにし礼さんが訳した日本語詞で歌うこの演奏会は、日本語での第九の合唱としては全国でもっとも歴史が古く、ギネスへの登録が検討されたこともあったとか。コロナ禍を経て、じつに3年ぶりとなった今回の演奏会開催に向けて尽力された運営委員会委員長の中村厚子さんに、お話を伺いました。

多くの力に支えられて

2年間のコロナでの開催中止は本当にもどかしい気持ちでいっぱいでした。

第32回、第33回は開催に向けて運営委員会で準備を進めていたためナンバリングは継続しましたが、他県での合唱でクラスタの発生があったり、コロナ禍で練習がなかなかできなかったりと、さまざまな状況を鑑みて中止の判断となりました。

そんななか、これまで参加いただいていた方たちの高齢化も進んでしまったことも

あって、今回どれだけの方が参加してくれるかという心配もありましたが、多くの方のお力添えもあり、無事に開催の運びとなりました。

今回は初めての方々が非常に多く、中学生の男の子も1名、参加してくれました。大勢の大人のなかに、そうやってひとりでも気持ちがあつて飛び込んできてくれたのは、本当にうれしかったです。

参加人数の心配がなくなった一方、全体の3分の1が初参加の方というところで、今度は最初の練習できちんと歌になるかどうかという心配もあったんですけどね(笑)。



けの人数が集まってくれたことには本当に感謝です。合唱は何十人もの力を合わせて初めて形になるものですから。

また、その何十人の方々の周りにはご家族やご友人がいて、その支えがあつてこそ成り立つものでもありません。

そうやって数えきれないほどの力の方たちの力に支えられてきたからこそ、これだけ長く続けられているのだと思います。継続は力なりといいますが、ただ伝統があるというだけで続けていけるものはありませんかね。

見て歌ってワクワクを体験

今後も運営委員会としては東員町の三大文化事業のひとつとして、文化を想う気持ちをもって継承していきたいと考えていますが、参加して

いただける方には純粋に生のオーケストラの演奏、そこで歌う高揚感、ワクワクする気持ちを体験してほしいと思います。

私自身、合唱団に参加していた自分の子どもがオーケストラの演奏で歌っている姿を見てワクワクした気持ちになつたことが、参加するきっかけだったんです。

そのとき後押ししてくれた合唱団の先生の「経験がなくても大丈夫」という言葉は、本当にそのとおりでした。今回ご来場いただいた、もし少しでも舞台上に参加してみたいと思ってもらえたならぜひ気軽に参加していただけたらうれしいです。

今後は子ども合唱団の募集、暗譜での合唱など、目標はいろいろとありますが、まずはマスクをはずして思いっきり歌いたいですね(笑)。



東員で「日本の第九」を歌う会
運営委員会 委員長 中村厚子さん

初めての「第九」体験記 ドキドキ・ワクワク・ヤッター

東員町 前教育長 岡野譲治

今回、「東員「日本の第九」演奏会」に出演者として初めて参加しました。練習初日に58ページにもなる楽譜をいただき、中を見てびっくり。わけのわからない♪と記号で埋められていました。これは大変なところへ来たなと、心臓がドキドキしてきました。

練習会は毎週月曜日の19時から21時で、7月下旬から合計で21回。私は仕事の関係で10月からの参加となり、2ヶ月で出来るのかという不安感でも心臓がドキドキしてきました。

練習は、パートごとに分かれて行ないました。最初に先生のピアノに合わせて声質を調べ、パートを決めていただきました。パートはバス、テノール、アルト、ソプラノの4種類で、私はバスに決まりました。

ドキドキ感いっぱいの練習でしたが、回を重ねるごとに練習日待ちが遠くなつてきて、不思議な気持ちになりました。いつのまにか、第九が歌えるというワクワク感が高まっていたのです。

それには、いろんな理由がありました。練習場で隣の人が「今、ここ」ところを説明しているよ。マイカーで線を引いていくと歌いやすいよ」と、いつも優しく教えてくれたこと。

先生方が「初めて参加する人もたくさんいるのでゆっくりいきますね」と、いつも初心者を意識した丁寧な指導をしてくださったこと。

それに伴い、少しずつながら自分の歌が上達していく自覚を持てたこと。

世話役の人が、毎回「初めてのときはみんな緊張します。わからないことがあれば、なんでも聞いてくださいね」と繰り返し気遣ってくださいましたこと。

そして参加者の方たちが「私も初めてですよ」「参加して友達が増えました」と気軽に話しかけてくれたこと。このような時間や交流の積み重ねが、ドキドキ感をワクワク感に変えていったのでした。

しかも、この感情は私だけのものではなく、一緒に参加した複数の方たちも、異口同音に言っていました。12月24日にはリハーサルを迎え、オーケストラとの共演、ソリストとの通し練習、指揮者の指導、入退場の練習を終えると、いよいよ明日を待つばかりになりました。夜は興奮して眠れるか不安でしたが、疲れていたのでしょうか、ぐっすり寝て朝を迎えました。

そして、12月25日の本番。黒の礼服に蝶ネクタイの正装で歌いました。本番はあつという間の時間でした。田久保先生の指揮は合唱団をひとつにし、本当に歌いやすかったことだけが記憶にあります。

最後に「歓喜は世界の母なり」と歌い上げたとき、心の底から「ヤッター」という気持ち湧き上がりました。うまく歌えたとか下手だったとかは、まったく関係ありませんでした。

田久保先生の指揮、オーケストラの演奏、ソリスト、合唱団がひとつになった感動だけが残っていました。

我が家のかまくら殿

2022年のクリスマススイブは名古屋市内でも雪が降り積もりました。

予想外の雪景色に大はしゃぎの子どもたちは、朝ごはんもそぞろに準備万端、いざ外へ！

これまでは降るにしても年に数度、それも積もるか積もらないか程度だったため、雪遊びといっても手のひらサイズの小さな雪だるまが拵えられるぐらいでした。

でも、今日の雪の量なら……憧れのかまくらが作れるのでは!?

兎にも角にも、いざチャレンジ！

スコップで雪をかき集めては、山を大きくし、ペタペタと固めて、中を丁寧にくり抜いて……。

途中、かまくら作りに飽きた息子から放たれる雪玉の妨害を受けつつも、1時間ほどの格闘の末

に完成！

さすがに大人が入れるサイズは無理でしたが、息子はしゃがめば入っているように見え……なくもない(笑)。

その後、ご近所を散歩してみると、どのご家庭の玄関先にも雪だるまがお出迎えておりました。みなさんそれぞれ、雪を楽しんだ様子が伺えて微笑ましく、こんなイブも悪くないなと達成感でいっぱいの母でした！

(愛知県・あさくらさん・42歳)



昨年、9歳の長女にも彼女独自のコミュニケーションが形成されてきていることを教えられた年でした。

そして、時にはそのなかでの人間関係に悩むなど、着実に「子ども」の殻を打ち破る時が迫っているように感じます。

(そこに親だからといって安易に踏み込むことで傷つけてしまうこともあり、自分のデリカシーのなさに反省する年でもあった訳ですが……)

さて、今年で3年目となる空手道場も彼女独自のコミュニケーションのひとつでしよう。

新春に行われた神前奉納稽古では個人の型奉納を任せられ、そのプレッシャーもなんのその、見事に果たしてみせた姿には本当に我が娘かと目を疑うようでした。

年下の門下生への対応や、諸先輩方や先生方へのご挨拶などを見ていても、昨年から大きく



成長していることに、さらにかかれます。

まだまだ、子どもとしての表情も時折見せてくれますが、この先はきっとその割合が減っていくのでしようね。

親の手を離れ自分の羽で飛び立つ準備をしようとしている彼女に、寂しさを感じない訳ではありませんが、今はただただその成長を喜びたいと思います。

飛び立つ空は果てしなく広いことを祈って。

(愛知県・本庄将之・42歳)

飛び立つ背を前に

世界中が

地に生る。

この前、友人の係の手伝いで、配り物をしていました。

すると、ある子が「ありがとう」と言ってくれたのです。

自分のした行動に感謝して、それを伝えてくれることがうれしかったです。そして、ありがとうと言ってくれて、ありがとうと感じました。

これは、日常でありふれたことで、でもあたりまえではない、ありがとうだと思っています。

毎朝あいさつをしてくれる人がいること、そうじをしてくれる人がいること、自分を友達と言ってくれる人がいること、その日常のすべてがありがとうです。

ありがとうと言われてありがとうと感じるといいう人が世界中にあふれたら、小さな幸せがたくさんうまれます。そして、世界中がたがいなを思いやっています。

(東員第一中学校・1年生・一色琉朱)

昨年、枯れた声で叫び歌う姿や、馬に振り回されても必死に耐える姿、身を挺して乗り手を守る姿からは、地域の伝統と歴史を担う覚悟がヒシヒシとこころかビシビシと伝わってくる。

その熱量は、3年に渡る映像の中で、馬が上らない悔しさや上がった時の喜びで最高潮を迎え、思わず鳥肌が立ち拳を握っていた。

昨今、地域の祭事の継続には少子化や高齢化の問題がツねに付き纏う。そこへコロナによる足止めが加わって、さらに追い打ちをかけられているように思う。

しかし、こうした古くからの伝統こそ、地域社



多度祭に携わる人々の姿を3年に渡って追ったドキュメンタリー映画で、祭りの目玉である「上げ馬神事」は、東員町の大社祭でもおなじみのものだ。

映画を観て最初に感じた印象を言葉にするならば「そこに確かに生きていく」ということ。それほどまでに過去の映像から、強烈な「生きる力」を感じずにはいられなかった。

スクリーンに映る若者たちの姿は、ともするとただの悪ノリのようにも見えるかもしれない。

しかし、枯れた声で叫び歌う姿や、馬に振り回されても必死に耐える姿、身を挺して乗り手を守る姿からは、地域の伝統と歴史を担う覚悟がヒシヒシとこころかビシビシと伝わってくる。

その熱量は、3年に渡る映像の中で、馬が上らない悔しさや上がった時の喜びで最高潮を迎え、思わず鳥肌が立ち拳を握っていた。

会場の繋がりに対して大きな役割を果たしているのではないだろうか。

自分はどうのように地域社会と関わってきたらどうかと我が身を顧みて、いろいろと考えてもしまふ映画だった。そういう意味でも、観た人の数だけ受け止め方があるはずだ。ぜひ、ひとりでも多くの方にご覧いただければと思う。

映画の終盤、3年間を通してカメラが追い続けた青年に監督が問う、多度祭の魅力についての回答が印象に残った。

「子どもの頃から憧れ続けて、もう何が魅力かわからない」

そう、かつては地域の祭りでも太鼓を叩く先輩、祭囃子を奏でる先輩の姿に憧れをいだいた人も多いのではないだろうか。

それこそが地域の伝統、文化や関係性を守る役目を担っていることへの、きつかけとなる気持ちだったのかもしれない。

さて、今の時代に生きる我々は憧れでもらうだけの背中を地域や社会で見せられているだろうか。

(津島市・本の虫干し・40代)

投稿募集

投稿先 (お便り)
〒511-0255
三重県員弁郡東員町大字長深 3393
グッドニュース新聞社 記事投稿係

(メール)
info@goodnewspress.co.jp

グッドニュース新聞はポジティブな視点をはぐくむメディアとして、全国から届いたニュースを発信しています。ぜひ、あなたのまわりのグッドニュースをお寄せください!

(ホームページ) (Facebook) (Twitter)

投稿の際はタイトル、お名前(ペンネーム)、ご住所、年齢、ご職業をお書き添えください。掲載にあたっては事前にご連絡を差し上げます。

編集室より

今年も各地で成人式が開催されました。昨年から成人年齢が18歳になったことで、東員町のように「二十歳を祝う会」などと名称を変えて行なった自治体も多かったようです。

成人式といえば10歳で「2分の1成人式」を行なう学校や自治体も増えていますが、珍しいものだと40歳で「2倍成人式」、50歳で「盛人式」を開催した地域もあったとか。

そうして人生の節目をイベント化することは、前向きな方向転換や仕切り直しをするためのきっかけづくりにもなりそうです。人生100年時代、何だってチャレンジしていきたいですね。